



(隔月連載)

レッスン
密着
レポ

ウララ・ササキ先生

第13回

Urara Sasaki 幼少より音楽家の両親とともにイタリアへ渡る。12歳でヴェネツィア・フェニーチェ劇場にてデビューコンサート。パドヴァ国立音楽院を首席及び名誉賞を得て卒業。ウィーン国立音楽大学首席卒業。ロベレ・ドーロ国際音楽コンクール(伊)第1位、チッタ・デイ・チェント音楽コンクール(伊)第1位など、多数のコンクールで優勝。ミラノ、ローマ、ジュノヴァ、ヴェネツィアを始めとするイタリア各地、ドイツ、ウィーン、スイス、アメリカでリサイタル及びオーケストラと多数協演。日本ギロック協会名誉会員、近年よりギロックに関するピアノレスナーのための公開講座やトークコンサートを各地で開催等、国内外で活躍している。2005年秋、カメラータ・トウキョウよりソロアルバム「バックハムズーニ：シャコンヌ&シュルホフ：ホットミュージック」、全音楽譜よりギロック作品「アクセント・オン」をリリース。草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティヴァルの公式伴奏者兼通訳者、日本ギロック協会名誉会員。第1回高松国際ピアノコンクール、大阪国際音楽コンクールでは毎年審査員を務めている。

取材・文—飯田有抄
写真—岡本 央

今回の密着レポは、国内外でピアニスト、指導者としてご活躍のウララ・ササキ先生のレッスンです。本日の生徒さんは、20代のピアノの先生。大人の方、それも指導者をレッスンすることの意義については、インタビューコーナーでたっぷりご紹介します。

「自分のピアノの音色を生涯追求してこそ、先生の教室もレベルアップする」と考えるウララ先生。若い指導者に、いったいどんなレッスンをなさっているのでしょうか。いざ潜入!

本日のレッスン曲

ベートーヴェン
ピアノ・ソナタ 第30番 ホ長調 Op.109
第1楽章、第2楽章



〈ご協力いただいた生徒さん〉

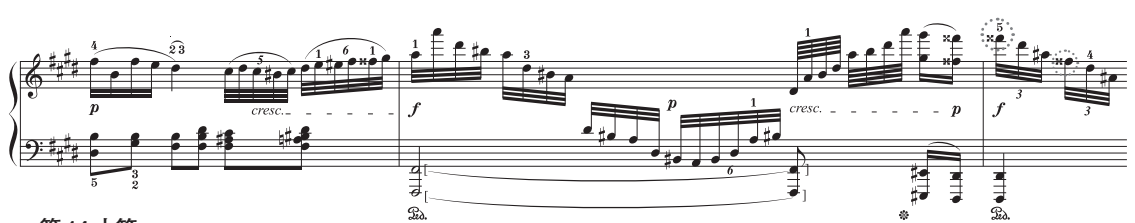
梶原さくらさん

音大卒業後、母とともに仙台にて「かはらピアノ教室」を運営。昨年8月より、月1~2回のペースでウラ・ササキ先生のレッスンを受けている。「ウラ先生のレッスンを受けてから、自分の生徒に対しても具体的な言葉でアドバイスできるようになりました。毎回発見があります！」

譜例1 第1楽章 冒頭



第9小節~



第14小節~



譜例2 第1楽章 第33小節~



レッスンはテンポよく進む。指導者を相手とするレッスンでは、ウラ先生のアドバイスは「あくまでひとつの例」として語られていく。

注目ポイント

1

アウトタクトの
感じ方

ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第30番は、巨大な第29番『ハンマークラヴィーア』の次に書かれた後期の作品で、叙情性と自由さに富んでいる。99小節というコンパクトな第1楽章（譜例1）は、通常のソ

ナタ形式ではなくロンド形式に近い。愛らしい雰囲気 Vivace, ma non troppo (A) と、即興的で情熱的な Adagio espressivo (B) というまったく異なる性格の2つの主題が、A-B-A-B-A と入れ替わる。

「Aはアフタクトで始まる2拍子です。梶原さんは、4小節ごとに大きなフレーズ感をもって演奏してくれました。では細かな音型に注目してみましょう。右手はソ#シーシファ#、ミソ#ーソ#レ・と小さな山を登り降りしながら進んでいきます。山の頂点では同じ音を2回弾きますが、2つの音の意味合いはまったく違いますね。アフタクトで登る音型の方は、軽く力を抜いてしまうのではなく、次の強拍に向けて伸びを感じさせたいところ。例えば、1つ目の山の「シ」の音をアルファベットで書くと「Si」。この「i」に重みや深さを持たせるようなイメージで弾きましょう。カタカナなら「スイ」となりますね。「イ」を感じるだけで、2つ目の音へのつながり、バトンタッチがうまくいきます」

アフタクトの音に適度な重みが出ると、自然と次の強拍の音がしっかりと鳴る。弱-強という2拍で、 $\langle \rangle$ というデュナーミクの付いた小さな山が自然とできる。この小山を積み重ねるようにして、Aは構成されていくのだ。

「さて、このとき左手は何をしているのでしょうか。左手も登って降りてという音型を弾いていますが、1つ1つの頭に8分休符が付いています。“あと打ち”感をきちんと出したいですね。音はなくても音楽がある、それが休符です。ただお休みしているだけではないんです。和声感も意識して弾きましょう」



音に深みを持たせるには重力をうまく利用したり、指の腹をたっぷり使ったり。気分や雰囲気伝える言葉だけに頼るのではなく、身体の使い方を具体的にアドバイスするのも、ウララ流指導のポイントだ。

注目ポイント
2
**espressivo は
音型をクリアに捉えて**

主題B (Adagio espressivo) は、*f* で嬰ハ短調の減七和音をかき鳴らすという、ただならぬ雰囲気幕を開ける。

「右手の最高音のラは、あまり力んで押し続けたい方がいいですね。重力に任せてしまいましょう。硬直してしまうと、次の音に対して良くない影響を与えてしまいます」

11小節目の3拍目からはクレッシェンドし、即興的なパッセージが現れる。

「ここは、次の12小節目に向かうステップとしてのアフタクトと捉えましょう。左手の減七の和音が持つスペシャルな響きも意識して。13小節目からのアルペジオでは、ダブルシャープのファが現れます。この音は長調のシンボルです。左手で弾

くときにも、コードの単なる部品のようになってしまわないように」

14小節目には *espressivo* と記されている。

「*espressivo* とあると、『歌いましょう』とか『何かしなくちゃ』とか思いがちですが、その必要はないんです。『外に向けて表現する』という意味なので、音型の特徴をきちんと捉えて、それを自然に提示するだけで充分なんです。右手の動きを見てください。軸になっている音がありますね。シです。シを中心に、周りの音が遊んでいます。ここは *p* なので、シを弾くときの打鍵は鋭くカッンと当てない方がいいですね。でもよく響くように、適度な打鍵スピードは必要です。

続く両手の3連符は、『ここから3連符!』と境目をはっきりさせず、あくまでフレーズの中で自然と変化するのがいいでしょう」

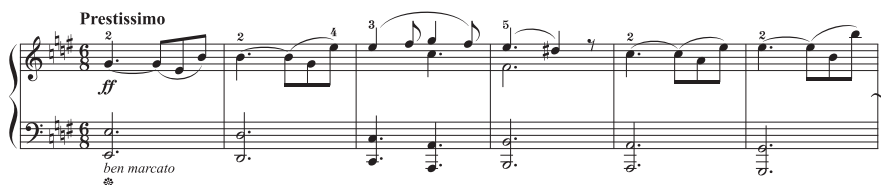
15小節目の終わりには主題A (Tempo I) が戻ってくる。

「直前のスケールは、Aへと向かっていきます。1音1音きちんと認識して、自分の意思よりも音が前に出てしまわないように」

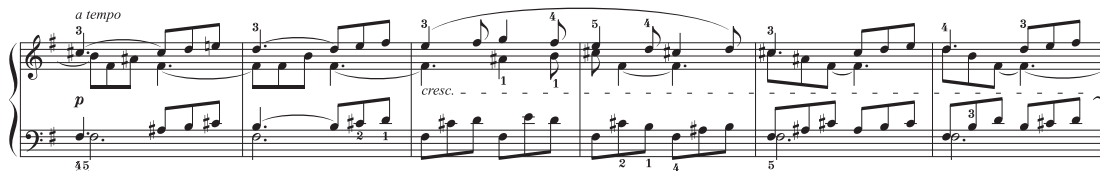
2度目に登場するAは長めだが、基本は最初の8小節と同じ。ただし強弱記号には留意したい。

「25小節目の *p* を存分にエンジョイした上で、27小節目の *cresc.* に入ります。急に膨らませず、聴いている人をじわじわと驚かせてあげましょう。33小節目から(譜例2)は、2拍目に *sf p* が付いて“あと打ち”感が出ます。音量だけでなく重みを出したいですね。荷物を持ち上げるときに踏ん張るように、1つ1つお腹に力を入れて、48小節目のクライマックスへ向かっていきます」

譜例3 第2楽章 冒頭



譜例4 第2楽章 第33小節～



譜例5 第2楽章 第70小節～



譜例6 第2楽章 第83小節～



注目ポイント

3

タランテラに躍動感を出すには

第2楽章は Prestissimo で突き進む。8分の6拍子のタランテラのリズムが特徴的だ(譜例3)。「この楽章はタランテラらしいリズムをきちんと出せれば、50%は成功したようなもの(笑)。8分音符を短く軽く弾いてしまいがちですが、そうするとタランテラらしくなりません。捉え方は ♪♪♪♪♪♪♪♪…ではなく、♪♪♪♪♪♪♪♪…です。8分音符にきちんと重みを持たせると、

少しコミカルな躍動感が出ますね。

33小節目からは、多声の響きに注目(譜例4)。

「右手は2声です。どうすれば2声に聞こえるでしょう。音量の差だけでなく、私なら、上はレガートに、下は打鍵の握力を変えてタッチにも差をつけますね。タイの音には重みをつけて。37～38小節の左手も2声を意識して。ファ#が心臓音のように鳴り続けています。その上で他の音が遊んでいる。そうした遊び心を捕らえると、タランテラがより生き活きとしてきますよ」

70小節目には左手にオクターヴのトレモロが現れる(譜例5)。「左手は何でしょう?」という質問に「ティンパニですね」と即答する梶原さん。



「そうですね、もしティンパニ奏者にこの部分を弾かせたら、小節ごとに表情をつけないかもしれないですね。ここはあくまで一定に、サウンド感を楽しみましょう」

右手はここも2声。「83小節目から(譜例6)は、タイでつながれた音の減衰を耳で確認しながら、他の声部の音量をバランスよく出していきます。減衰を聴きつつハーモニーを作るのも、大切なポイントですね」

先生に Interview



——ベートーヴェンの後期ソナタを通じて、指導者へのレッスンをを見せていただきました。「指導者向け」として心がけていらっしゃることはありますか？

「教え方」を教えることはないですね。指導者であっても自分の音を追及することが、その人のピアノ教室の活性化につながると思っています。指導者自身が自立していくための、私は単なるアドバイザー—というか、カウンセラーのような役割を果たしているに過ぎません。

ある程度の土台は必要ですが、20～30代はまだその人自身が伸びる時期です。この時期は譜読みのスピードも体力もありますし、30代までに経験したことはその後の土台になりますから、ハイペースで多くの曲を仕上げていくべきです。ピアノ曲のレパートリーは膨大なので、「やったことのある曲」が多ければ多いほど、指導者としての強みになります。長い目で考えながら、「いつまでにどの曲を仕上げる」といった具体的なプランを立てていくことが大

事ですね。

——レッスンの中では「私なら、こう弾きます」といった形でアドバイスをされていましたね。

あくまで1例ですし、私の考えを押し付けるつもりはありません。大人の方は、これまでにいろいろな指導を受けてこられ、自分でも考えを持って演奏されています。でも、「ここは今まで誰からも指摘されたことはないだろう」という部分を探し当てて、そこを言ってあげると新しい知識になりますよね。自分も含めて、どんなに長くピアノをやっているも、誰にでもまだ知らないことはあるんです。「知らない」を「知る」に変えていくことが、大人のレッスンの楽しみだと思いますし、知って「ラッキー！」と思ってもらえれば嬉しいですね。曲の解釈だけでなく、身体の使い方なども、できるだけ具体的にお伝えするようにしています。

——ウララ先生は、9歳からイタリアに渡られたということで、ヨーロッ

パの音楽教育の中で育ってこられました。そんな先生から見て、日本のピアノ教育がさらに伸ばすべきところは何かと思いますか？

リズム感でしょうか。音楽と言葉は密接に結びついていると思います。イタリア語やフランス語、ドイツ語などは、日本語にはない子音の発音やリズムがあります。それらがやはり音楽とつながっていて—例えば今回のタランテラも、イタリア語に近いリズムなんです—フレーズやニュアンスの作り方に影響しています。歌曲でなくとも、ピアノ音楽を学ぶ上でも、やはり言葉を知ることは大事ですね。

別にペラペラとヨーロッパの言葉を話せなくていいんです。それぞれの言葉の響きに興味を持って、ニュアンスを感じることが、音楽を解釈し演奏する助けになるかもしれません。今はラジオでもネットでも、すぐに外国語を耳にできるようになりました。そうしたツールを利用するのもいいと思います。